Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-27

平田篤胤国学の研究 : その世界観の確立の道程を中心に

朴, 鍾祐

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
1996-03-31

(Date of Publication)
2008-02-04

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲1470

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.11501/3116818

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001470

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏名・（本籍）　朴（パク）　鍾祐（チョンウ）　（大韓民国）

博士の専攻分野の名称　博　士（学　術）

学位記番号　博い第246号

学位授与の要件　学位規則第４条第１項該当

学位授与の日付　平成８年３月31日

学位論文題目　**平田篤胤国学の研究－その世界観の確立の道程を中心に－**

審査委員　主査　教授　野口武彦

教授　布川清司　教授　眞方忠道

論文内容の要旨

序論

本論文は，近世日本で国学思想をつちかった土壌の構造背景として「鎖国」と「平和」という二つの要件を考える。「鎖国」は日本文化の機軸が「他者」主導から「自己」主導に移ったことを意味し，「平和」は思想の現世的・世俗的性格が強調され，また，ゆっくり時間をかけて思想闘争がなされる条件を整備する。江戸幕府が政治理念として公認した朱子学は，たんに包括的な哲学体系だっただけでなく，それに対抗して儒学内部では古学派，やがて儒学の外側に国学が形成されてゆく思想的母胎になった。

日本と朝鮮とでは，ひとしく中国思想としての儒学を受容していながら，それへの反応を異にする。朱子学は両班（ヤンパン）階級社会を中心に学問的発達を遂げたが，観念性に片寄る弊害を生じた。日本の国学に相当するのが「実学」であるが，それは国学のように自国中心主義的ではなかった。朝鮮文化史における二つの要件は「事大」「中華」である。外来思想の受容が「外」に規定されるか「内」に規定されるかに差異が生じる。論者によれば，「『儒学』という試薬をそれぞれの試験紙に反応させる」と「日本の国学はそれに見事に陽性反応を見せている」とされる。

その国学のなかでももっとも激烈に反応したのが，平田篤胤であった。以下，本論文は篤胤国学がいかに中華的世界観から脱却し，いかに新しい世界観の構築を試みたかを明らかにすることを目的とする。

第一章　篤胤の歌論とその周辺

国学にいくつもの「個別学問」分野があるが，その一つは歌学である。基本的に，国学は歌論・文芸論中心と古道論・神道論中心の二つに分類される。篤胤は第二のグループに属するが，『歌道大意』を著している。篤胤は本居宣長の「死後の弟子」を自称する立場から，賀茂真淵に発し，宣長と古道論をめぐって決裂した村田春海ら江戸派に批判的であり，和歌もまた「究極的には『神の道へのさとり』であるという枠組み」を堅持した。だからまた形式的な完成にはこだわらず，かえって狂歌師鹿

爪真顔の戯詠をまじめに評価したところに篤胤のユニークさが認められる。

第二章　篤胤の国学における「鬼神論」の位相
――『鬼神新論』をめぐって――

「鬼神論」とは，もともとは人間の死後の霊魂の有無をめぐる論争である。しかし思想史の上では一連の国学＝儒学論争の争点となり，「儒学と国学，儒教と神道という江戸思想史の対立構造をあらわにしながら，一方では国学の体系づくりに拍車をかけ」る端緒を開いた。篤胤の出発点は，太宰春台の『呵妄書』への反駁である。春台が古代日本に「道」はなく，神道は「巫祝の道」にすぎないといったのに対して，篤胤は中華「聖人の道」には「皇国の道」，「聖人」には「神」を対置して反論した。

篤胤の有鬼説（つまり有神論）の要点は，「神（カミ）」が「神（しん）」ではなく「実体的有形の存在」であるとするところにある。篤胤はいかにして「神」の実在性を確証するか。その根拠は「伝説（つたへごと）」に求められ，記紀解読も宣長説を大きく修正してなされる。有鬼説の主張はそこからどうしても，独特の「幽冥界」を想定することになり，さらには「人間の死後にかかわる問題」を再浮上させて，次章の論点を引き出してくる。

第三章　篤胤国学における救いの構造
――『霊能真柱』の世界観を中心に――

文化８年（1811）前後，篤胤は『古史成文』『古史徴』などの根本神典の整備と並行して『霊能真柱』を完成する。これは宇宙生成論（コスモゴニイ）の書物である。その国学的宇宙像は，師宣長からも承認された服部中庸の『三大考』にもとづきつつ，それを修正して独自に展開する。『三大考』は，宇宙構造を「天」・「地」・「泉」という三つの空間から形成されているものととらえ，「天」は高天原，「地」は豊葦原，「泉」は夜見国と配当する。宣長国学は人間死後の問題に冷淡で，人間は生前の善悪と無関係におしなべて夜見国に行くとしていたが，篤胤はそれを訂正して，「泉」は死者の国ではなく，「悪」と「穢」の世界であると主張する。

論者は，「この学問と世界観の出発点として登場するのが，『霊の行方』と『霊の安定（しづまり）』の概念である」といっている。「行方」は「安定」の可否，つまり死後の安心を規定する。篤胤国学は宣長のいうように死者は無差別に夜見国へ行くのではなく，悪人の魂だけがそこへ追いやられて「妖神邪鬼（まがかみまがもの）」になる。一方，善人の魂は，「幽冥界」におもむく。その「幽冥（かくりよ）」は「顕世（うつしよ）」と別空間ではなく，共空間であり，現実の日常では向こうから見えるがこちらからは見えないという関係にある。三大の「地」は顕幽両空間である。

このような幽冥観は，記紀神話中の大国主神に特別な比重を持たせることで成立する。篤胤は，「顕明事（あらはごと，現世支配）」は天照大神，「幽冥事（かみごと，死後世界の管理）」は大国主神と職掌を分割し，記紀伝承を大幅に読み替え，大国主神を幽冥の主宰神，善悪の審判神として位置づけることによって，有鬼論，宇宙生成論，神統論，善悪応報論などに統一的な解釈体系を与えた。

第四章　『志都能石屋』考

本書は篤胤国学の一分野をなす医道論である。自分自身も医者であった篤胤は，家族を次々と失ったことから従来の医学，医術に疑問を抱き，「古道」の一つとしての医道を考えるにいたった。篤胤が医道のみなもとと見なすのは，大穴牟遅神（おおなむちのかみ）と少彦名神（すくなひこのかみ）

の二柱である。この二柱はまた酒作りの神，まじないの神でもある。論者は，両神が「常世の国」に渡ったとある伝承の篤胤による解釈に注目する。宣長説は「常世の国」をただ外国（とつくに）のこととするが，篤胤はそれはまた「幽界」をも意味すると主張する。両神は一度「皇国」を去り，「幽界」を経て，「彼国々の現界」へ顕出したとされる。ここには日本の神々による外国経営という思考契機がある。篤胤は，中国は国柄が悪いから病気が多く，医術が発達したが，医道では日本が優秀だと主張する。論者によれば，これは「全体的世界像においても日本が世界の中心であるという発想にほかならない」のである。

結論

以上をしめくくって本論文は，第一に歌道による「日本的神」の認識，第二に有鬼論の独自の基礎づけ，第三に霊魂の行方をさとす世界像の提示，第四に医道を人間の生死の問題の癒しと見る視点の導入によって，篤胤国学が顕幽二重構造を体系化し，幕末日本の民衆に「『悪』と『死』からの救済が可能なものとして完成された」世界観を確立したといえる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，江戸時代後期の国学者平田篤胤の思想を，「その世界観の確立の道程を中心に」と副題したとおり，本居宣長の死後の弟子として出発した篤胤が，独特の国学的世界像を打ち立てる過程をあとづけ，歌論・鬼神論・宇宙生成論・医道論という4章構成をとっている。

序論

本論文は近世国学，なかんずく平田篤胤をなぜ取り上げたかの動機として，江戸時代の鎖国体制のうちにできあがった国学思想の対「内」性と「外」部排除性という特質に注目したことをまず述べる。日本と朝鮮は，17世紀以降，ひとしく儒学，それも朱子学の影響下にあったが，中華思想への反応は著しく違っていたという問題意識が論考の出発点であることが明白に示されている。

第一章　篤胤の歌論とその周辺

歌学・歌論は国学の不可欠な一分野である。本章は，篤胤初期の『歌道大意』を取り上げ，篤胤の立場が，同じ賀茂真淵から発しながら古道論をめぐって宣長と決裂した村田春海ら江戸派に批判的であったことを指摘し，和歌もまた「究極には『神の道へのさとり』であるという枠組み」であるとする姿勢を堅持していることを強調する。

第二章　篤胤の国学における「鬼神論」の位相
――『鬼神新論』をめぐって――

本章は，もともとは人間の死後の霊魂の有無をめぐる論争だった「鬼神論」が，国学・儒学論争の重大な争点となった経過をよく解明したと評価できる。篤胤は，儒学の「神（しん）」に国学の「神（かみ）」を対置する。論者はこれを「実体的有形の存在」と明確に把握する。論旨はそこから篤胤が宣長の記紀解読を大きく修正してまでも想定した独自の幽冥界への道筋の跡づけに移行し，「人間の死後にかかわる問題」を再浮上させて次章の論点を引き出してくる。

第三章　篤胤国学における救いの構造
――『霊能真柱』の世界観を中心に――

『霊能真柱』は宇宙生成論（コスモゴニイ）の書物であり，世界構造を「天」（高天原），「地」（豊葦原）・「泉」（夜見国）と三極的に説明する。人間死後の問題には冷淡で，霊魂は生前の善悪とは

無関係，無差別に夜見国に行くとした宣長説を改変した篤胤は，善人の魂は「幽冥（かくりよ）」に赴くと主張する。それは同じ「地」にあって，「顕世（うつしよ）」とは別空間ではなく共空間であり，向こうからは見えるがこちらからは見えないという関係にある。論者が正当にも関心を注ぐのは，この幽冥観が記紀神話中の大国主神に特別な比重を持たせることで成立しているという事実である。本章は，生者の世界は天照大神が，死後の世界は大国主神がそれぞれ別個に管掌するとし，大国主神を幽冥の主宰神，善悪の審判神として位置づける篤胤国学の特色をよく理解していると認められる。

第四章　『志都能石屋』考

本書は，篤胤国学の一分野をなす医道論書『志都能石屋』を取り上げ，また全体を一貫する国学文脈のしめくくりをつけている。医道は「古道」の一つであり，たんなる医術ではなくて人間の生前・死後の双方にかかわる霊の治療であるととらえられる。同時にまた医道の創始神の一柱が大穴牟遅神－大国主神の別名－であり，優秀な医道をもって外国（常世国」）経営に当ったとする説に日本中心主義の原型があることも見逃されていない。

結論

以上を集約して本論文は，第一に歌道による「日本的神」の認識，第二に有鬼論の独自の基礎づけ，第三に霊魂の行方をさとす世界像の提示，第四に医道を人間の生死の問題の癒しと見る視点の導入という順序で篤胤を読む構成を通じて，篤胤国学が顕幽二重構造を体系化し，幕末日本の民衆に「悪と死からの救済」を約束する世界観を確立した経過をよく解読し，篤胤独特の国学体系を整理するのに成功したと評価できる。

上記のように各章の論点を総合して審査した結果，朴鍾祐君の論文は，平田篤胤という強烈な個性，かつまた非常にプロブレマティックな思想である篤胤国学の難解さを克服して客観的に位置づるという達成を遂げていると認め，当審査委員会三名は，同君に博士（学術）の学位を授与するのが妥当であると判定した。